

# 敬老音楽會 台日文化歡喜交流

【人間社記者 童于庭 東京報導】2014-09-07

中国文化は古くからお年寄りを敬い、賢人を尊ぶことを重視してきました。そして、この美德がアジア各地にも伝わっています。日本にも9月に敬老の日があります。NPO法人国際BLIAは昨年引き続き、再び9月6日に「2014年敬老の日—台日音楽舞踊交流会 in 板橋」を開催しました。音楽会には台北駐日経済文化代表処顧問の朱文清氏、豊島区議員の中田兵衛氏、板橋区議員の長瀬達也氏及び後援会の方々、板橋区熊野町町会長の古木勝利氏、NPO法人国際BLIA理事長の満潤法師、東京佛光山寺住職の覚用法師をお招きし、約300名の方々が参加しました。



今回の活動は単なる音楽会の開催だけではなく、慈嘉法師の著作である『敬告佛子書』（邦題『順美への手紙』）の日本語版を発表する場でもありました。星雲大師の理念を根付かせるため各種講座や活動を行い、日本の多くの方々を導くことができました。しかし、書籍の出版もとても重要なことであり、東京佛光山寺はこの本を何度も校正しました。分かりやすい表現を用い、日本の方々にも本の主人公の「順美」のように著者と対話し、善美な人間仏教理念を学ぶことができるようにしました。

満潤法師は皆さんに敬老の日の由来を説明すると共に、NPOが日本で行ってきた公益活動、震災復興、台日文化交流などを報告しました。



朱文清氏も東京国立博物館で翠玉白菜が展示されていることが、台湾と日本の密接なつながりの証であると話しました。そしてまた、このような台湾伝統の風情を有する舞踊は忘れられないものになるだろうと、観衆の皆さんに自信を持って述べました。

中田議員は主催者に謝意を述べました。豊島区区民は約26万人ですが、NPOは30万枚のマスクを寄贈し、関係者は驚くと共に感動しました。また、今回の素晴らしいプログラムにも非常に期待していると述べました。



長瀬議員は最近台湾で起こった災難に対し心痛の気持ちを表し、速やかな復興を希望していると述べました。また、主催者が開催地を板橋区に選んだことに対し光栄であると述べました。





最後に、古木町会長が台湾佛光山本山へ行った体験を語りました。台湾人の情熱が、自分が外国人であることを感じさせず、台湾の印象が深く刻まれたと述べました。

この音楽会は地元のご年輩の方々に懐かしい歌を思い出させました。日本舞踊の際には皆さんが陶醉し、思い出の中に入っていました。吉祥舞踊団は軽やかなリズムに合わせて台湾民族舞踊を踊り、無限の活気を会場に降り注ぎました。星雲グループは日本舞踊「憂鬱な島」を踊りました。そして、皆さんは往年を振り返り歌っていました。



佛光青年団も歌で自己紹介をしました。演技と同時に青年団紹介映像を流しました。「朝山」という曲を皆さんに聞いてもらおうと共に人間仏教への深い信念を表しました。プログラム最後には会場の皆さんで日本歌曲「故郷」を大合唱しました。観客席の皆さんはこの音楽会の観衆であり、出演者でもありました。



日本舞踊が山地舞(台湾原住民の踊り)と出会い、日本民謡が人間音縁と出会い、台湾と日本の交流は音楽芸術によってより一層緊密になりました。今年のプログラムは観衆に楽しんでもらえました。素晴らしい演技は皆さんの称賛を得、ご年配の方たちにも喜んでもらえ、敬老と台日交流の目的を達成することができました。

